

『ドイツ・イデオロギー』と疎外の理論

——『ドイツ・イデオロギー』研究序説——

重 田 晃 一

まえがき

わたくしは、さきに、「初期マルクスの一考察」（本誌第八巻第六号）という標題でひとつの試論を公けにしたが、そこでの試みの中心は、若きマルクスのパリ時代（一八四四年）の「経済学研究ノート」のひとつである。「ジェームズ・ミル評註」をてがかりに、この評註にみられる疎外の理論の発展と、この理論にもとづいてなされた「国民経済学」の批判とを分析することによつて、若きマルクスの経済学批判の発端にいくばくかの光を投じてみることにあつた。本稿はひきつづき執筆を予定している次稿とともに、前稿のあとを承けて、『ドイツ・イデオロギー』（一八四五～四六年）にみられるさきの諸点での発展をあとづけんがために、ひとまずこの草稿における疎外の理論の特質に若干の考察をほどこしてみたものである。

周知のように、若きマルクスの理論的、実践的関心の中軸は、近代市民社会の全体をおおう人間の自己疎外という普遍的対象の理論的究明と、その止揚の方向・条件をさぐりだすことにあつた。かれはこのような問題意識から市民社会の分析にはいり、はやくも、独仏年誌の諸論稿では、問題解決の基本的立場を社会主義におくとともに、やがて、パリ時代には、その鍵を経済学の中にもとめることになるのだが、いまそこに到達するまでの歩みを簡単にあとづけてみると、われわれはその中から、(一)フォイエルバッハによつてなすとげられた宗教批判の政治批判への転換、(二)人間の生活の国家における共同生活と市民社会における私人としての生活とへの分裂という、近代市民社会に特有の二元論の批判、(三)「疎外された労働」の視角からなされた資本制生産関係の分析、という三つの発展段階を、つまり、(一)イデオロギーの疎外の批判から現実的疎外の批判へ、(二)政治的疎外と経済的疎外の区別と後者の規定性の確認、(三)近代市民社会における経済的疎外の批判、という疎外の理論の発展系列をとりだすことができる。

さて、『ドイツ・イデオロギー』の中から若きマルクスの経済学批判の前進をしるす諸契機をひきだそうとすればあい、さしあたり、さきの疎外の理論の展開のうち、とりわけ市民社会における経済的疎外を分析した箇所との関連が、つまり、この草稿ではさきの経済的疎外の分析がいかに発展せしめられているかがつきとめられねばならないが、そのためにはあらかじめ、疎外の理論全体が『ドイツ・イデオロギー』の中で占める位置と構造とが明らかにされておかねばならない。

『ドイツ・イデオロギー』と疎外の理論(重田)

二〇

いうまでもなく『ドイツ・イデオロギー』の主題は、直接には、『聖家族』におけるB・パウアーの自己意識の哲学の批判のあとを承けて、この批判を青年ヘーゲル派の全思想・全運動に拡大することにあつた。だがこれを疎外の理論の発展の視角から眺めると、それはひとつの大きな転換点にさしかかっているということが出来る。すなわちこれまでの研究もまたしばしば力説してきたように、かつて疎外の理論を展開するにあつて、若きマルクスはドイツ古典哲学、とくにヘーゲル、フォイエルバッハの疎外の哲学をよりどころとし、それから深い影響をうけ、また一定の程度においてこれを承け継いだ、いまや『ドイツ・イデオロギー』はそのフォイエルバッハの哲学の基礎範疇である「人間の本質」や「類的存在」などの範疇に、またそれにもとづいて展開された「人間の自己疎外の過程」という歴史のとらえかたにたいして、次のようなはなはだきびしい批評をくだしている。「もはや分業のもとに包摂されない個人を哲学者達は『人間』(der Mensch) という名のもとに理想として心にえがき、そしてわれわれによつて展開された全過程を『人間』の発展過程としてとらえてきた。その結果、それぞれの歴史的段階におけるいままでの個人たちのかわりに『人間』があてがわれて、これが歴史の推進力として記述された。このようにして全過程は『人間』の自己疎外の過程としてとらえられるようになった。」(S. 99, 古在訳一〇五ページ)。

具体的にはフォイエルバッハ↓ヘス↓真正社会主義者の系列に属する思想家達にむかつて投げかけられた、この批評のときびしさは、さしあたりこれを『ドイツ・イデオロギー』の成立を規制した次のような事情とむすびつけて考えるとき、ひとまず了解されるであろう。すでに一言したように、この草稿の主題は、さきの思想家達をも一翼に含む青年ヘーゲル派の全思想・全運動の総合的な批判にあつたが、その底には、ヘーゲルがいうように、「精神の概念が基礎におかれ、かくて歴史は精神自体の過程であるということが示されねばならない」³⁾のではなくて、歴史

とは世界の对象的、經驗的、現実的な連関の運動そのものであることであり、ほかならぬこの運動こそ、一方では精神の過程におけるそれをも含む一切の疎外をうみだすとともに、また、その止揚の条件をもつくりだすものだ、という若きマルクスの独自の認識の確立があつた。したがつて、ここでは、フォイエルバッハから真正社会主義者に至るまでの思想家達の疎外の理論の評価にあたつても、それが自己にたいしてもつ連関の側面よりも、自己との區別・対立の側面が、つまり、かれらの用いる「人間」とか「類」とかいつた範疇も、結局のところ、青年ヘーゲル派がヘーゲルから承け継いだ「実体」(D・シュトラウス)、「自己意識」(B・バウアー)などの範疇が徹底的に世俗化されたものにすぎず、これらの範疇を基礎にすえて展開された疎外の理論もまた、とどのつまり、一切の对象的、經驗的、現実的な連関をなんらかの形で精神の過程に解消することに帰着し、その意味でかれらの「世界震撼的」な思想も、旧来のドイツ哲学の枠から一步も踏みでるものでない、との評価が、なにはさておいても強調されねばならなかつた。

このように、『ドイツ・イデオロギー』にみられる疎外の理論にたいする評価の態度のきびしさは、さしあたり、この草稿の以上のような構想と関連するのだが、とはいふものの、それが必ずしもかかる当面の一時的な批判の課題に完全に制約されたものでないことは、この草稿を転回点として、疎外という概念が——概念そのものとしては——以後のマルクスの著作、論文、草稿等から漸くその姿をうすめてゆくという、きわめて注目に値する事実からも明らかである。⁽⁶⁾

では、疎外の理論はこの段階に至つて完全に止揚されたのだろうか？ わたくしはそうは考えない。一例をあげれば、『ドイツ・イデオロギー』は、『経済学・哲学手稿』(以下四四年『手稿』と略称)や『聖家族』が「疎外された労働」の視角から経済学の基本的性格を規定した箇所との連繫を示して、「私有は人間の個性ばかりでなく、事物の個性

『ドイツ・イデオロギー』と疎外の理論(重田)

一一一

をも疎外する」(S. 212, 古在訳一七三ページ)という視角から地代や利潤に言及しているし、また、かなりしばしば——ある箇所では「哲学者達にわかりよくいえば」(S. 34, 古在訳四六ページ)との留保をつけてではあるが——疎外について論じている。ではこの草稿における疎外の理論の特質はどの点にあり、それはどのように理解されたいのか?

これまで一般に説かれてきたように『ドイツ・イデオロギー』の画期的意義は、そこではじめて唯物史観の定式化がなされた点にあるが、この唯物史観の確立がこの草稿での疎外の理論の全体の在り方を規定づけていることを指摘して、A・コルニユは次のようにいつている。「『ドイツ・イデオロギー』で唯物史観は本質的特徴の彫琢をほどこされたが、その結果、疎外の問題はもはや核心的な問題としてというよりも、たしかに本質的ではあるが、むしろ私有財産の組織によつて制約された現象として考察され、生産力と生産関係の発展としてとらえられた普遍的な歴史的発展の枠組の中にはめこまれるに至つた」と。またW・ヤーンは論文「K・マルクスの初期の著作にみられる労働の疎外という概念の経済的内容」のむすびで、一方ではコルニユとはほぼ同一の解釈の方向を示しつつも、また他方ではとくに経済的疎外の分析について、「労働の疎外の理論は資本主義の客観的運動法則をあらわす価値・剰余価値論にとつてかわられる」⁽⁹⁾、といういつそう具体的な展望をうちだしている。こまかい議論だてをのぞけば、結論的にいつてこれらの展望は正しいだろう。だが問題はその先に、つまりこの点(疎外の理論の唯物史観への止揚)を『ドイツ・イデオロギー』に即して理論的・実証的に明らかにすることにあり、とりわけヤーンについていえば、これ(疎外された労働)の視角からの市民社会の分析の価値・剰余価値論への止揚)を経済学批判成立史の中で検証することが課題として残されている。ところが、これまでのところこの仕事は、少なくとも両者によつては果されて⁽¹¹⁾いない。

さて、これまでの叙述から、『ドイツ・イデオロギー』を経済学批判成立史の視角からとりあつかおうとするばあいに、まず、これまでの諸論稿で展開されてきた経済的疎外の分析のこの草稿でのゆくえをつきとめねばならぬこと(問題一)、だがそのためには、この疎外の分析を一構成部分に含む疎外の理論全体の『ドイツ・イデオロギー』での特質を究明する必要がある(問題二)、しかもこの特質たるやこの草稿における唯物史観の確立といわれるものによつて規定づけられていること(問題三)、などが明らかにされた。以下、本稿では、『ドイツ・イデオロギー』における唯物史観の成立が含むいくつかの問題を検討しながら、この唯物史観の成立に媒介されて、疎外の理論がいかなる発展・変貌を遂げてゆくかを考察しよう。

註(1) ここでのマルクスの批判の基本的な方向は、かれが「ヘーゲルの『現象学』から」「実在的な、客観的な、私のそとに存在する鎖を、たんに観念的な、たんに主観的な、たんに私のうちに存在する鎖に、したがって一切の外的、感性的な斗争を、純粹な思想斗争に転換する術」を承け継いだ点 (Vgl. Marx/Engels, *Die heilige Familie*, *Marx-Engels Werke* Bd. 2, S.87, 石堂訳一四一ページ) にむけられた。なおこの点については、同書第八章の四「思弁的構成の秘密」(Ebenda, S.203~205, 邦訳三三〇~三三四ページ)を参照のこと。

(2) いまいちいち文献を列挙することは避けるが、G・ルカーチ、A・コルニエ等の初期マルクス研究に関する著作、論文等がそれである。

(3) Hegel, *Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte*, hrsg. von E. Gans. ただし『ドイツ・イデオロギー』(全集第三卷一五二ページ、唯研訳二〇九ページ)より再引用。

(4) Vgl. Marx/Engels, *Die deutsche Ideologie*, *Marx-Engels Werke*, Bd. 3, S. 18~19. 古在訳二一三ページ。

(5) Vgl. ebenda, S. 19~20. 古在訳二二二~二二三ページ。

(6) 後期のマルクスの著作その他における疎外概念の使用例については、大月版マル・エン選集の索引や杉原教授の『ミルとマルクス』第一部第二章第四節の註一(ただし労働の疎外)によつてその大要を検出できる。その他に『剰余価値学

『ドイツ・イデオロギー』と疎外の理論(重田)

『ドイツ・イデオロギー』と疎外の理論(重田)

二四

説史』から一箇所を指摘することができる(カウツキー版第三卷三五四ページ、邦訳三五三ページ。ただし邦訳では「外化せられたる形態」と訳出されている)が、そこでは疎外の問題が貨幣及び資本の物神性との関連で論ぜられていて、興味あかろ。

(7) A. Cornu, *Karl Marx, Die ökonomisch-philosophischen Manuskripte*, Berlin, 1955, S. 54.

(8) Vgl. W. Jahn, *Der ökonomische Inhalt des Begriffs der Entfremdung der Arbeit in den Frühschriften von K. Marx, Wirtschaftswissenschaften*, Nr. 6, 1957, S. 864.

なお、この点については、わが国では森信成氏が、戦後いちちちやく、コルニユヤーンと同一の見解を示しておられるが、詳しくは同氏『史的唯物論の根本問題』の後篇、第二章、第二節(「疎外概念はなぜ後期マルクスにおいて消失したか」)を参照のこと。

(9) *Ebenda*, S. 865.

(10) いま立ち入って論ずる余裕はないが、ヤーンが疎外の理論の唯物史観への止揚を説いて、「以後に続く著作では、それはもはやどんな重要な役割も演じない」(a. a. O. S. 864)と断定的に述べるばあい、初期のマルクスと後期のマルクスとの間に断絶をみるきらいが残りはすまいか。労働の自己疎外という視角が、資本主義分析の方法意識として、後期のマルクスにもはつきりと引き継がれていることは、註(9)での指摘をてがかりに後期のマルクスの著作、とくに草稿をたどつてゆくだけでも、はつきりと読みとることができる。

(11) 厳密に言えば必ずしもそうでない。コルニユは『マルクスと近代思想』(日本語版は著者による大幅な改訂があつて原文とはかなり異つたものになつている)の第六章の中に、「ドイツ・イデオロギー」という一節をもうけている。だがそこでは唯物史観の解説が叙述の大半を占め、それと疎外の理論との関連が説かれているとは考えられない。

11

かつて杉原教授も言及されたように、初期マルクス研究のひとつの偏向として、われわれは、初期のマルクスと後期のマルクスとを機械的に対立させ、後者にくらべて前者をとりわけ重視する見解を指摘することができる。恐

らくこの偏向の根源のひとつは、初期の疎外の理論と後期の唯物史観とを機械的に対立させる点にあると考えられるが、もしそうだとすれば、その根は意外に深く、例えばすでに言及したところのかかる偏向の克服をめざして奮闘しつつあるヤーンでさえも、この点では、逆の方向で同じ誤りへの危険におちいつているかと思われる。すなわち、かれは疎外の理論の唯物史観、あるいは価値・剰余価値論への止揚という正しい視角から両者の関係を明らかにしようとして試みながらも、結局はこの止揚の概念に含まれる保存の側面を過少評価し、後者の成立の後には「それ(疎外の理論)はもはやどんな重要な役割も演じない」、との結論を下すことによつて、さきの偏向とは逆の形ではあるが、なお前者と後者とを機械的に対立させる傾きをもっている。すでに述べたように、本稿は、ほかならぬ、この唯物史観と疎外の理論との関連をつきとめようとするのだから、この点での偏向については充分の警戒が肝要である。

いまこのような反省に立つて問題を眺めるとき、われわれはただちに次の事実、すなわち、たしかに『ドイツ・イデオロギー』での唯物史観の確立とともに疎外の理論は前者の体系の中へ止揚されるのだが、それに先立つ諸論稿では、前者のばあいと逆に疎外の理論の展開が考察の軸となりつつも、それと複雑にからみあいながら後の唯物史観の諸萌芽が徐々に形成されつつあったことに気がつく。したがって初期の疎外の理論と後期の唯物史観とを機械的に対立せしめず、しかも前者の後者への止揚を充分にみさだめるためには、疎外の理論の展開とむすびつきながら形成されつつあった唯物史観の諸萌芽が、あらかじめ徹底的にえぐりだされておこななくてはならない。なぜなら、この点を明らかにしておいたうえで、はじめ、この史観の体系的構成が唯物史観の諸命題のうちどの部分の確立とむすびついて可能となつたかが、明確にでき、またそれとの関連で、これまで問題展開の主軸となつた疎外の理論が、どの契機に媒介されて、逆にこの唯物史観の体系の中に止揚されるに至つたかが、確定できるからであ

『ドイツ・イデオロギー』と疎外の理論(重田)

二六

る。以下、順次これらの諸点を明らかにしてゆくが、本節ではさしあたり、唯物史観の展開を可能ならしめたところのこの史観の基礎にある思想的立場の形成について考察することにしよう。

『ドイツ・イデオロギー』は唯物史観の叙述をおこなうに先立つて、また繰り返しその叙述の各所で、この理論の展開がよつて立つ思想的基礎をくつきりと浮き彫りに示すために、「ドイツ哲学一般」の立場を「無前提な立場」からの出發を誇るものと規定し、これにみずからの立場をきつぱりと対置して、「現実的な前提」、つまり「純粹に經驗的なやりかたで確認することのできる」前提から考察をすすめる立場だといっている。⁽³⁾『ドイツ・イデオロギー』によれば、前者の立場は、結局のところ「自己意識、世界精神、その他の形而上学的幽霊のたんなる抽象的行為」(S. 46 右在訳六五ページ)から歴史を構成することに帰着するものであつた。後者の立場については、それはさらにここに「現実的な前提」といわれるものを、①「現実的な諸個人」、②「かれらの行動」、③「現存の、だが同時にかれら自身の行動によつてつくりだされる、かれらの物質的な生活条件」という三つの契機にわかち、「現実的な前提」の立場に立つとは、ここにいわれる「かれら自身の行動」の展開を軸にして、これら三つの契機の相互規定的な發展を動的・総合的にとらえることだといっている。⁽⁴⁾

歴史の思弁的構成にふけるドイツの全哲学と決定的に対立する、この唯物論的な歴史把握への途をはじめてきりひらいたのは、少なくともドイツではフォイエルバッハであつた。かつて四四年『手稿』はこの点に触れ、フォイエルバッハが直観的、感性的人間(↓自然的人間)を考察の前提におき、かかる人間相互の関係を理論の基礎としたことにたいして、「真の唯物論と実在科学の基礎をあたえた」ものと高く評価した。⁽⁵⁾ところがそのフォイエルバッハにたいして、いまや『ドイツ・イデオロギー』は、「かれは愛情と友情とのほかには、なにも『人間にたいする人間の』

『人間的な関係』を知らず、これを観念化している」(S. 44, 古在訳六三ページ)といひ、「フォイエルバッハが唯物論者であるかぎり、歴史はかれのもとにはみられず、そしてかれが歴史を考慮にいれるかぎり、かれはなんら唯物論者ではない」(S. 45, 古在訳六四ページ)、とのなはだてきびしい批判をくだしている。

では、さきに見たフォイエルバッハへの高い評価からかかる冷酷なまでの批判への急激な旋回は、なにをもととしてひきおこされたのだろうか？ わたくしは、さきにこの草稿における「現実的前提」といわれるものの三つの契機を指摘したが、それとの照応を示して、『ドイツ・イデオロギー』はフォイエルバッハの欠陥の根源を、まず第一に、かれが人間をその「あたえられた社会的なつながり」、つまり、「かれらをいま在るようなものにしてきた、かれらの現存の生活条件」のもとにつかまなかつたこと (der Mensch という人間把握の形而上学的性格) に求めている。ところで、ここに「社会的なつながり」といわれ、「現存の生活条件」とよばれるものは、すでに一言したように、たしかに予め与えられたものとしてかれらの「眼のまえにみいだされるもの」であるが、同時にそれは、「かれら自身の行動によつてつくりだされる」ものでもある。この後の点をみおとしている点をついて、『ドイツ・イデオロギー』はフォイエルバッハの誤りのいまひとつの根源を、かれが「人間というものを『感性的対象』としてのみとらえて、『感性的活動』としてとらえなかつた」こと⁽⁶⁾にみている。

だがこのような方向へのフォイエルバッハの克服、したがつてまたここでいわれる「現実的な前提」の設定は、『ドイツ・イデオロギー』に至つてはじめて生れたのではなくて、すでにパリ時代に、つまり「実証的⁽⁶⁾な、人間主義的、自然主義的な批判は、フ、ォ、イ、ェ、ル、バ、ッ、ハ、から⁽⁶⁾はじまる」という讚美がなされつつあつたそのときに、この讚美の背後で、それへの決定的な前進がなしとげられつつあつたこと——この点がまず確認されておかねばならない。

かつてわたくしは、パリ時代における疎外の理論の発展を、その基底にある労働観、人間観、社会観の発展にまでさかのぼって検討する機会をもつた。⁽⁹⁾ そのさい後者との関連で明らかにしておいたように、パリ時代のマルクスは、——フォイエルバッハへの一批判をめざしながら——(1)人間の自然にたいする関係と、(2)人間の人間にたいする関係を生産的実践(『労働』)を基軸にすえてとらえようと試みたが、それはそのまま、人間とは抽象的な *der Mensch* ではなくて、(1)との関連でいえば「現存の物質的な条件」にしばりつけられた、また(2)とむすびついて、「あたえられた社会的なつながり」においてある、「現実的な諸個人」であることが意識的につかみだされつつあつた、ということが出来る。さらにこの視角には、全体として、労働を軸にして自然と人間との歴史的な発展を動的・総合的につかむという唯物史観の礎石の設定が内包されているのであつて、その意味で、すでに述べたフォイエルバッハの欠陥の克服(『「現実的な前提」の確立』への広大な展望が、すでにここにきりひらかれている)とすることができる。では、この唯物史観の礎石の上に立つ唯物史観の諸命題は、疎外の理論の展開とむすびつきながらどの程度までくりひろげられていただろうか? 以下、節をあらためてこの点を考察しよう。

註(1) 杉原四郎『ミルとマルクス』、六〇ページ、六五ページ参照。

(2) 第一節の註(10)参照。

(3) Vgl. Marx/Engels, *Die deutsche Ideologie, Marx-Engels Werke* Bd. 3, S. 20, S. 27~28 u.s.w. 古在訳二三~二四ページ、その他三三~三四ページ等。

(4) Vgl. *ebenda*, S. 20, 古在訳二三~二四ページ。この視点がいかにか唯物史観展開の礎石として重きをなしているかにつらうかは、これを唯物史観の叙述とむすびつけて説いている同書、三八ページ(邦訳五二ページ)の叙述が参照されるべきである。

(5) Vgl. K. Marx, *Ökonomisch-philosophische Manuskripte* (1844), *MEGA* Abt. I, Bd. 3, S. 151~152, 邦訳『大

月版選集補卷4、三九六〜三九七ページ。

- (6) Vgl. Marx/Engels, Die deutsche Ideologie, Werke Bd. 3, S. 44. 古在訳六三二ページ。
 (7) Vgl. ebenda, S. 44. 古在訳六三二ページ。
 (8) K. Marx, Manuskripte, MEGA Abt. I, Bd. 3, S. 34. 邦訳大月版選集補卷4、二二九ページ。
 (9) 拙稿「初期マルクスの一考察」〔経済論集〕第八卷第六号第二節〕参照。

二

いま一般に唯物史観として論ぜられるものから、それを構成する主要な理論的諸契機をとりだして示すと、われわれはまずそのひとつとして、土台と上部構造の区別と両者の規定・被規定の関係をめぐる問題を、次いで、この土台を構成する「社会の経済的構造」⁽¹⁾または「生産関係の総体」⁽²⁾といわれるものの歴史的な発展を説明する理論としての生産力と生産関係の関係をめぐる問題を、そして最後に、この生産関係の歴史的な形態的特質を規定する生産手段の所有の性格をめぐる問題をあげることができる。以下、本節でも、考察の基準をこれらの諸契機の形成におきながら、『ドイツ・イデオロギー』以前の諸論稿での唯物史観の諸萌芽の形成に検討をくわえることにしよう。

一、生産力——すぐあとで述べるように、パリ時代の諸論稿は生産関係の概念こそ用いていないが、その実質を構成する部分についてすでにかなりの程度の成熟をみせている。ところがこの生産関係とならんで生産様式の構成契機をなす生産力の問題については、同じパリ時代の諸論稿はほとんどいうにたるだけの展開をおこなっていない。例えば遊部教授もまたこの点について、「たちいつていえば、疎外の理論には私有財産の本質をめぐつていまだ不十分ではあるが、資本主義的生産関係の把握がみられるが、一方の生産力の概念がみられない」といつておら⁽³⁾

『ドイツ・イデオロギー』と疎外の理論(重田)

れる。だがそれとともに、教授もこの評価に留保をつけて、「しかし類的存在としての人間の観念はのちに労働過程論の摸索を可能ならしめることによつて生産力の概念を準備したであろう」と述べておられるように、この概念展開への基礎視角は、すでにパリ時代に提示されていることがみおとされてはならない。ここではまずその点を確認しておこう。

さきの遊部教授の指摘からもうかがえるように、若きマルクスの疎外の理論の基礎には、「類的存在」としての人間という人間の本質観があつた。もともとそれはフォイエルバッハから由来するものであつたが、それとともにパリ時代のマルクスは、「生産行為のやりかたのなかに一つの種の全性格が、種の類的性格がよこたわつている」との規定からもうかがわれるように、人間が類的存在であることの確証の場を、すぐれて生産的実践の場にもとめた。しかも、「ほかならぬ対象的世界の加工において、人間は一個の類的存在としてはじめて現実的に確証される」との規定にみられるように、ここでは生産的実践はその構成契機のひとつとして、「人間が他の人間にたいしてたつ關係」とともに、「人間による自然への働きかけ」の側面を含んでいることがはつきりとかみとられている。ところで、後に『ドイツ・イデオロギー』はその異文の一片で、生産を「人間による自然への働きかけ」と「人間による人間への働きかけ」という二つの側面の統一としてつかみ、さらにこの二つの側面に「生産力と交通」という註をくわえているのだから、この点をさきの叙述とむすびあわせて考えるとき、われわれはすでにパリ時代に、後の生産力概念展開の基礎視角がうちだされていたことを、十分に論定できる。そしてこの点は、——いまはこれ以上論及する余裕がないが——四四年『手稿』が後の『資本論』の労働過程論（＝生産力の側面）につらなる部分のかなりこゝこゝんだ叙述をあたえていることから、十分に傍証されるであらう。

また四四年『手稿』は、後のばあいのように整備されてもいず、未反省のままではあるが、少くとも二カ所で生産力という概念を用いている。そのうちのひとつ、つまり、「資本の文明的勝利は、死んだ事物のかわりに人間の労働を富の源泉として発見し、創定したところにある」との観点に立つて、リカードウ、ジェームズ・ミル等による地主攻撃の所説を要約した部分にみいだされる例は、そこでの生産力の概念を、生産関係とならんで史的唯物論の基礎範疇をかたちづくる生産力概念にそのまま等置するのがいささか無理に思われるので、ここでは触れないことにしよう。だが次の例は、もつと注目の必要があるのではあるまいか。すなわち手稿はいう、「分業は労働の生産力 (die produktive Kraft der Arbeit)、社会の富と文明を高めるにもかかわらず、それは労働者を機械にまでひきさげる。労働 (「の生産力の発展」と読め—筆者) は資本の集積を、したがって社会の富の増大をよびおこす。しかるに、それは労働者をますます資本家に従属させ、いつそう激しい競争になげこみ、かれを過剰生産——そのあとにはひどい不況がやつてくる——の狩猟のなかにおとし入れるのである」⁽¹⁰⁾。

ここでは、分業による生産力の増大は、「財産の不平等にも拘らず社会の最下級の人々に至るまで一般に富裕」ならしめる、というスミスの顛倒した市民社会像が、若きマルクスの手で、分業にもとづく労働の生産力の発展は、一方では社会の富をますます増大せしめるにもかかわらず、他方では労働者をますます窮乏化せしめる、という市民社会像へ正置される、その再顛倒の姿が鮮かに浮き彫りされていてまことに興味深い。だがそれとともに、これを別の観点からいえば、ここでは唯物史観にいわゆる生産力と生産関係の矛盾が、資本制生産様式に即してつかみとられつつあるとみることもでき、その意味でこの例はみのがされてはならぬであろう。

もとよりこの点についてはなお論ぜらるべき多くの問題が残されているけれども、以上の諸点を顧るとき、一見

したところはなほ唐突にみえる『ドイツ・イデオロギー』での生産力の問題の展開は、その基本線についていえば、さきの資本制生産様式における生産力と生産関係の矛盾の把握と、すでに述べた労働過程論の端的展開との独自の統合（前者の視点の後者への拡充と一般化）の線上に出現したものと推定して、ほぼ間違いないまい。

二、生産関係——なるほど、「生産関係」あるいはそれに類する概念そのものについてみれば、われわれは『ドイツ・イデオロギー』以前には、わずかに四四年『手稿』から「生産の新しい様式」(die neue Weise der Produktion)、「生産様式、つまり生活様式」という二つの表現を⁽¹²⁾、また「ボアギューベル評註」(パリ時代「経済学研究ノート」のひとつ)から「その国の全生産様式」という語を⁽¹³⁾、あるいは、『聖家族』からは「ある時代の産業、つまり生活そのものの直接的生産様式」という表現を検出することができるにとどまり、生産関係という表現はまったくみいだされない。だがこれまでの研究も説いているように⁽¹⁴⁾、四四年『手稿』における「疎外された労働」の視角からなされた市民社会の分析は、事実上、賃労働と資本という資本制的な生産関係を分析しているといえる⁽¹⁵⁾ことができる。

さらにこの点で注目し値するのは、「ミル評註」にみられる「人間の社会的交通」という人間の社会的諸関係のとらえかたであろう。『ドイツ・イデオロギー』は、あるときは、生産関係と同じ意味に交通関係(または様式)という概念を用い、ときには、しばしば「生産関係(または様式)ならびに交通関係(または様式)」という表現を用いているように、そこでは、交通関係(または様式)という概念が非常に重要なはたらきをしている⁽¹⁶⁾。ところが、もともこの概念は、「ミル評註」の「人間の社会的交通」という表現に由来するものと考えられ、しかも後者は、「ミル評註」で、フォイエルバッハ批判と「国民経済学」批判という両面批判の思想的武器として重要な役割を果たした

ものであつた。すなわち、すでに一言したように、パリ時代のマルクスは、フォイエルバッハにいわゆる「人間にたいする人間の關係」と「人間と自然との統一」の基軸を、生産的実践（『勞働』の場にもとめるに至つたが、「ミル評註」は、さらにすすんで、この勞働をとおしてむすばれる生産と交換の關係を、「社会的交通」という概念で包括的にとらえている。⁽¹⁷⁾ここでは生産關係範疇の形成過程についてくわしく触れる余裕はないが、わたくしは、交通關係↓生産關係（あるいは交通關係↓生産關係・交通關係）というこの概念生成の過程を想定するものであり、⁽¹⁸⁾もしこの想定が正しければ、この範疇は、すでにパリ時代に、一般に予想される以上の成熟をとげていたということができよう。

三、生産様式（『勞働』と生産手段との結合様式）——すでに述べたように、四四年『手稿』は、「疎外された勞働』の視角から事実上、資本制的生産關係を分析していた。さらに『手稿』は、封建的な生産關係の基礎が土地所有の特殊な在り方にあることを認め、これを疎外論の視角からとらえて、「封建的土地領有のなかに、すでに疎遠な力としての土地の人間にたいする支配がよこたわつている」⁽¹⁹⁾、と述べている。ところで、そのさい『手稿』は、この二つの生産様式の歴史的な形態的ながいを生産手段の所有の性格の差異から明らかにしないで、工業資本を「完成された私有財産」と規定し、封建的土地財産を「未完成な中途半端な私有財産」と規定している点に見られるように、この差異を、もつぱら、貨幣經濟の進展を媒介にして私有財産がどの程度まで流動化されるに至つたか（『不動産の動産化』、という観点からとらえている。⁽²⁰⁾だが、分析方法のこのような未熟さを問わねば、四四年『手稿』のこの指摘は、古代國家の基礎が奴隸制にあることを指摘した、「論文『プロイセン國王と社會改革——プロイセン人』にたいする批判的論評」や『聖家族』の一節とならんで、⁽²¹⁾上部構造の歴史的な在り方を規定する生産様式の歴史的な形態的特質の問題、および、この歴史的な形態的特質を異にする様々の生産様式の歴史的継起の問題が、徐々に

『ドイツ・イデオロギー』と疎外の理論(重田)

三四

若きマルクスの意識にのぼりつつあつたことをはつきりと示している。

四、土台と上部構造——以上の諸点の中でとくに(一)、(二)の点が、若きマルクスの疎外の理論の基礎にある独自の労働観、人間観、社会観の展開とむすびつくものだとするれば、とりわけ「土台と上部構造」の理論は、疎外の理論の展開とむすびついて生れたともいえよう。さきにパリ時代に至るまでの若きマルクスの疎外の理論の発展を三つの段階にわかち、これを図式的に示しておいたが、この展開は、これを別の観点から眺めれば、網の目のようにいりくんだ人間生活の複雑な構造連関から、本質的なものと非本質的なもの、規定するものと規定されるものとを区別しながら、その相互の関係を明らかにする歩みともみることができ、この歩みは、そのまま、「土台と上部構造」の理論への接近を示しているといえることができよう。とすれば、このようないわば下向的分析ともいうべきものの一応の到達点である四四年『手稿』が、「土台と上部構造」の理論の一定の成熟を示す次のような一節を収録しているのも、またきわめて当然のことだといえよう。

四四年『手稿』の一節はいつてゐる。「宗教、家族、国家、法、道德、科学、芸術等は、生産の特殊な在り方にすぎず、生産の一般的な法則に服する。人間的、生活の獲得としての私有財産の積極的な止揚は、したがつてあらゆる疎外の積極的な止揚であり、だからまた、人間が宗教、国家等からその人間的な、すなわち社会的な定在へかえることである」⁽²²⁾。

註(1) (2) K. Marx, *Zur Kritik der politischen Ökonomie*, Berlin 1961, S. 13. 邦訳「国民文庫版九ノ一」。

(3) (4) 遊部久蔵「疎外論の経済学的意義」(『三田学会雑誌』第五二巻第一号一〇〜一一ページ)。ただし教授が四四年『手稿』について「生産力の概念がみられない」といいきられる点については、いまま少し検討の余地が残されていると思われろ。

- (5) K. Marx, Manuskrifte, *MEGA* Abt. I, Bd. 3, S. 388. 邦訳『大月版選集補巻4、三〇六ページ。』
- (6) *Ebenda*, S. 388. 邦訳『同右、三〇八ページ。』
- (7) *Ebenda*, S. 389. 邦訳『同右、三〇九ページ。』
- (8) Vgl. Marx/Engels, Die deutsche Ideologie, *MEGA* Abt. I, Bd. 5, S. 573. 古在訳『三四ページ。』
- (9) Vgl. K. Marx, Manuskrifte, *MEGA* Abt. I, Bd. 3, S. 102.. 邦訳『大月版選集補巻4、三二六ページ。』ただしここで『Produktionskraft』と訳してゐる。
- (10) *Ebenda*, S. 44. 邦訳『同右、二四二ページ。』
- (11) A. Smith, Draft of the Wealth of Nations, in W. R. Scott, *Adam Smith as Student and Professor*, p. 328. 大道訳『九一ページ。』なおこの点については田義彦『経済学の生誕』『一九三〜二〇〇ページ』参照。
- (12) K. Marx, Manuskrifte, *MEGA* Abt. I, Bd. 3, S. 127, S. 129. 邦訳『大月版選集補巻4、三五九ページ、三六一ページ。』
- (13) K. Marx, Aus dem Exzerptheften (Paris, Anfang 1844~1845), *MEGA* Abt. I, Bd. 3, S. 576.
- (14) Marx/Engels, Die heilige Familie, *Werke* Bd. 2, S. 195. 石養謙『二五九〜二六〇ページ。』
- (15) Vgl. W. Jahn, *aa. O.*, S. 852, S. 854. 邦語文献ではすでに引用した遊部教授による指摘のほかに、宮本義男『資本論研究序説』『三〜四ページ』がある。
- (16) 『ドイツ・イデオロギー』における「交通」という表現の多義性を指摘して、ドイツ語版全集はその註の(4)で、「『交通』という用語は『ドイツ・イデオロギー』ではひじょうに広汎な内容をふくんでいる。この用語は個々人の、社会的集団の、またすべての国の間の物質的、精神的交通を包括している。マルクスとエンゲルスは、この著作で物質的な交通、とりわけ生産過程における人々の交通が他のすべての交通の土台をかたちづけていることを表明している」(*Werke* Bd. 3, S. 548) と述べてゐる。
- (17) 拙稿「初期マルクスの一考察」(『経済論集』第八巻第六号、八八〜八九ページ)参照。
- (18) すでに引用した例からもうかがわれるように、生産様式という概念は単に技術的な意味での生産様式としてばかりでなく、「生活様式」、「生活そのものの生産様式」という側面でも一ただしその立ち入った考察は全くおこなわれていない。

『ドイツ・イデオロギー』と疎外の理論(重田)

『ドイツ・イデオロギー』と疎外の理論(重田)

三六

い—とらえられてゐる。したがつていまま少し補つていえば、生産関係という概念は生産様式と交通関係という二つの概念の統合のうえに成立したのではあるまいか。

(19) K. Marx, *Manuskripte, MEGA Abt. I, Bd. 3, S. 76.* 邦訳、大月版選集補巻4、二八九ページ。

(20) *Vgl. ebenda, S. 77, S. 102~103.* 邦訳、同右、二九〇ページ、三二七~三二八ページ。

なおこの点については大島清「マルクス『経済学に関する手稿』について」(玉城、末永、鈴木共編『マルクス経済学体系』上巻所収)一〇三~一〇四ページ参照。

(21) 「論文『プロイセン国王と社会改革—プロイセン人』にたいする批判的論評」についてはドイツ語版全集第一巻四〇一~四〇二ページ(邦訳、大月版全集第一巻、四三八ページ)、『聖家族に』については同右、第二巻、一二〇ページ(石堂訳一九六ページ)を参照。

(22) K. Marx, *Manuskripte, MEGA Abt. I, Bd. 3, S. 115.* 邦訳、大月版選集補巻4、三四二ページ。

なおこの点を指摘したのは、W.A. Turetzki, *Die Entwicklung der Anschauungen von Marx und Engels über den Staat*, Berlin 1956, S. 33 (邦訳六五~六六ページ)、『および杉原四郎『ヒルとマルクス』(七七~七八ページ)が参照。

四

さて、それでは『ドイツ・イデオロギー』における唯物史観の成立の核心はどの点にあり、またこれまで問題展開の主軸となつていた疎外の理論は、いかなる契機に媒介されて、この唯物史観の体系の中に止揚されるに至つたのだろうか？ われわれは前節で『ドイツ・イデオロギー』以前の諸論稿にみられるこの史観の諸萌芽にかなり詳細な考察をほどこしたが、さきの問題にたいする解答はこれらの考察の中からおのずからひきだされてくる。

すでに述べたように、パリ時代のマルクスは、宗教、芸術、科学、道徳、国家、法などを「生産の在り方」によ

つて規定される上部構造としてとらえ、しかもこの「生産の在り方」を「社会的交通」その他の概念で、事実上、生産関係としてつかんでいた。だがそのばあい、例えば四四年『手稿』はすでに数カ所で生産力という概念を用いているにもかかわらずその充分な展開をおこなっていない、したがって、さきの生産関係をこの生産力という内容の「運動形式」という視角から、つまり前者を生産力の「内的構造」、「運動機構」としてつかむ点ではなおきわめて不十分であり、⁽¹⁾ 厳密な意味での生産様式範疇がなおつきりと確立されていなかった。⁽²⁾ したがってまた、すでに指摘したように、そこではそれぞれの歴史的諸時代を区別するメルクマールが、なによりもまず奴隸制的、封建的、資本主義的というそれぞれの生産様式の異質性にあることが充分に意識されてはいたものの、さらに進んで、これらの諸時代の歴史的な展開全体を、生産力の発展とそれに照応する生産関係の継起的展開として、つまり、歴史における連続の面と非連続の面とを前者に基礎をおきつつ相互媒介的にとらえるという形で合法的につかむことは、なおこの時期にはほとんど不可能であつた。かくてこの点への充分な論及は『ドイツ・イデオロギー』にゆだねられることになるのだが、わたくしはこの草稿の注目すべき第一の特徴をこの点に求めたい。

いまや『ドイツ・イデオロギー』はパリ時代までの展開のあとを承けて、一方では「人間の自然への働きかけ」の側面をすぐれて生産力の問題として意識するとともに、他方ではその上に立つて生産関係範疇の整備をはかることによつて、ここにさきの厳密な意味での生産様式範疇が確立され、土台の変化、発展の合法的な把握の礎石が築きあげられることになつた。以下この点についていまま少し立ち入つた考察をくわえてみよう。

一、生産関係（―交通関係）——パリ時代に、「人間の社会的交通」という表現で生産関係範疇の端緒的形成がみられることは、すでに指摘した。『ドイツ・イデオロギー』はこの端緒的形成のあとを承け、これをいつそう明確

『ドイツ・イデオロギー』と疎外の理論(重田)

三八

に規定して、まず生産関係(広義の)を「生活の生産」にさいしてとりむすばれる一定の「協働様式」としてとらえている。⁽³⁾このように、生産関係をまず一次的には「協働様式」としてとらえたうえで、さらに『ドイツ・イデオロギー』は、この協働の一形態たる分業(―疎外された形態⁽⁴⁾)を媒介にしてこの協働様式を所有関係、階級関係の側面からつかむことによつて、ここにすぐれた意味での生産関係範疇(狭義の)が成立することになる。

二、生産力―『ドイツ・イデオロギー』が「人間の自然にたいする働きかけ」の側面をすぐれて生産力の問題として意識し、定式化するに至っている点については、すでに一言した。ところでそのばあい、『ドイツ・イデオロギー』はさきの協働様式もまた、これを自然への働きかけの観点からみれば、「それ自身ひとつの生産力である」と明確に規定している。⁽⁵⁾かくていまやこの規定を媒介環にして、生産関係を生産力という内容の「運動形式」、「運動機構」としてつかむことが可能となり、ここにはじめて―「生産力の一定の発展段階の内部における諸個人の物質的交通の総体」(§ 36. 古在訳四九ページ)という表現に示されるように―生産力と生産関係は相即的に(生産力と生産関係の統一としての生産様式という視角)つかまれるに至り、また―「人間の達しうる生産諸力の量が社会状態を制約する」(§ 36. 古在訳三七ページ)という表現から明らかなように―生産力の発展とそれに照応する生産諸関係の継起的展開という歴史発展についての構想(生産様式の交替の歴史としての人類史)がうちたてられることになった。

さて、以上の叙述から明らかなように、『ドイツ・イデオロギー』に至つて、はじめて、生産力と生産関係という二範疇、およびその相互の関係が明確に定式化されることになつたが(土台の変化の合法的把握の問題の一応の解決)、それはまた、この土台の変化によつて媒介的に規定される上部構造の変化もまた、いつそう明確に規定される可能

性が生みだされたことを意味するものでもあった。かくてここに、パリ時代までの諸論稿の中で濃淡さまざまな度合をもつて形成されつつあつた唯物史観の諸要素は、いまや漸くひとつの体系にまでまとめあげられるに至つた。われわれは『ドイツ・イデオロギー』ではじめて、次のような唯物史観のテーゼの総括的表現をみいだす。

「したがつてこの歴史観はつぎの点にもとづいている。すなわち現実的な生産過程を、しかも直接的な生活の物質的生産から出発して展開すること。そしてこの生産様式とつながつて、これによつてうみだされるところの交通形態を、したがつて種々の段階における市民社会を全歴史の基礎としてつかむこと。さらにこの市民社会を国家としてのその活動において叙述するとともに、意識の種々な理論的所産および形態、すなわち宗教、哲学、道徳などをすべて市民社会から説明し、そしてそれらのものの発生過程を市民社会の種々の段階からあつづけること。このようにすれば当然また事態はその全体性において（したがつてまたこれら種々の面の交互作用も）叙述されうることになる。この歴史観は、……実践を觀念から説明するのではなくて、觀念的構成物を物質的実践から説明する」⁽¹⁾。

ところでそのさい、『ドイツ・イデオロギー』は、この唯物史観のテーゼの理論的な展開にあつて、後の説明とはいささか異つたゆかきたをしている。わたくしは『ドイツ・イデオロギー』の第二の特徴として、この点に注目したい。

かつて別稿で、わたくしは部分的に『ドイツ・イデオロギー』のたすけをかりながら、「ミル評註」が、「国民経済学」とそのイデオロギー的表現である功利主義思想とをむすびつける媒介的な範疇を、分業と交換に認め、この二つの範疇に疎外論の視角から批判をくわえることによつて、「国民経済学」批判の礎石を築きあげるに至つた次第を追究した。いま分業について要点を再述すると、「評註」は、交換価値、貨幣等が分業と切り離すことのできな

い関係をもつた範疇であることを明らかにしつつ、しかもこの分業たるや、交換とならんで、「人間の社会的交通の疎外された形態」にほかならぬことを指摘することによつて、これらの諸範疇の展開をおして市民社会の公益性を論証しようとした「国民経済学」のイデオロギー性(―虚偽意識性)を徹底的に暴露した。だが、そのさい明らかにしておいたように、パリ時代の分業把握には、なお多くの未展開のものが残されていた。⁽⁸⁾

『ドイツ・イデオロギー』を特徴づけるもののひとつは、それ以前の諸論稿では、なお問題の所在の抽出と批判の基本線の設定にとどまっていたさきの分業把握の面で、いちじるしい進展がみいだされることである。例えばR・L・ミークは、このような観点から、これまでおもに唯物史観確立の例証としてとりあげられてきたこの草稿の冒頭の「フォイエルバッハ」に、「フォイエルバッハに関する節の分析の核心は、じじつ、マルクスとエンゲルスが、分業そのものが内包している諸矛盾について、また、都市と農村とのあいだや、生産と商業とのあいだの、分業の種々の歴史的発展についてあたえている説明のなかにみいだされるべきである」⁽⁹⁾、との展望さえあたえている。『ドイツ・イデオロギー』における唯物史観展開の特異性とは、ここでは、ほかならぬこの旧来の分業把握の欠陥の克服・深化とむすびつけて、唯物史観の説明がおこなわれている点にある。さてこの点を、若きマルクスの疎外の理論のこの草稿における特質の問題と関連せしめつづきますこし立ち入つて考察すれば、次のようにとらえることができるだろう。

周知のように、唯物史観はその理論的構成要素のひとつとして、「土台と上部構造」に関する理論をもっているが、すでに指摘したように、それはパリ時代までの疎外の理論の展開の中で準備されたものであった。『ドイツ・イデオロギー』は、この準備のあとを承けつつも、これまでの諸論稿の中で明らかにされたさまざまに疎外の形態の全

体を、あらためて分業との関連から説きあかすことによつて、「土台と上部構造」の理論確立への橋渡しをしている。すなわち、すでに引用した唯物史観のテーゼからも明らかのように、上部構造はさらに宗教、哲学、芸術、道徳などと国家、法などの二つの領域にわかたれるが、『ドイツ・イデオロギー』は、おおまかにいつて、前者の成立を分業にもとづく精神的労働と肉体的労働の分離から説明し、後者については、これを分業にもとづく共同利害と特殊利害との分離・対立を媒介にしてとらえることによつて、これらのものが、ひとしくまた究極的には、「生産様式および交通様式」によつて規定されていることを明らかにしている。

また唯物史観は、この土台の変化を説明する理論として、生産力と生産関係との間の関係についての理論をもっているが、『ドイツ・イデオロギー』は生産力と生産関係との媒介環としての分業の位置をはじめて明らかにし、また、生産力の発展をすぐれて分業の側面からとらえることによつて、さきの問題への独自の接近方法を示している。さらに生産様式の歴史的形態的特質（―生産手段と労働力の結合様式）を規定する生産手段の所有の性格との関連でいえば、『ドイツ・イデオロギー』は断片的な叙述によつてではあるが、私有の発生、あるいは階級の成立を分業の発展とかわらせて説いていることが注目される。

さて、いまやこれまでの展望にもとずいて、『ドイツ・イデオロギー』における疎外の理論的特質（―止揚）を明らかにするのはこびとなつたが、ここではこれまでの考察をいま一度顧ることにして、ひとまずむすびとしたい。

- 註 (1) 生産力という内容の「運動形式」、「内的構造」、「運動機構」という側面からの生産関係の把握については、ドゥー
 コール、アベルガウス『経済学方法論の基礎』（第四章第二節「生産諸力の発展形式としての生産関係」）を参照のこと。
 (2) ただし、「生産様式」という概念が単に技術的な意味でのみつかまわけていたわけではない点については、前節註(18)

『ドイツ・イデオロギー』と疎外の理論(重田)

四二

参照。ここに厳密な意味での生産様式とは「労働力と生産手段との特殊歴史的な結合様式」としての生産様式を指している。マルクスに見られるこの概念の様々な用いかたについては、ドゥーコール、アベルガウス、前掲書、第五章「経済学の対象としての資本主義的生産様式」を参照。

(3) Vgl. Marx/Engels, *Die deutsche Ideologie, Werke Bd. 3, S. 29~30*, 古在訳三六~三七ページ。

(4) 「ジエームズ・ミル評註」はいう、「人間の活動の生産物の相互的な交換が交換取引、暴利商業として現象するようになり、活動それ自身の相互的な補足と交換とは分業として現象する。……社会的本質がその反対物として、つまり疎外の形態をとって存在するのだから、まさに人間の労働の統一は分割としてみ考察される」(MEGA Abt. I, Bd. 3, S. 540)。「ドイツ・イデオロギー」はこのような分業をしばしば「自然発生的分業」と規定している。

(5) 例えば『ドイツ・イデオロギー』は「分業と私有とはおなじ表現であり、おなじことが前者では活動についていいあらわされ、後者では活動の生産物についていいあらわされるのである」(S. 32, 古在訳四三ページ)といい、「分業によつてすでに制約されている諸階級」(S. 33, 古在訳四四ページ)という指示をあたえている。

(6) Marx/Engels, *Die deutsche Ideologie, Werke Bd. 3, S. 30*, 古在訳三七ページ。

(7) *Ebenda*, S. 37~38, 古在訳五一~五二ページ。

(8) 拙稿「初期マルクスの一考察」『経済論集』第八巻第六号、八一~八二ページ、一〇一~一〇二ページ、一〇六~一〇七ページ)参照。

(9) R. L. Meek, *Studies in the Labour Theory of Value*, London 1956, p. 142. 邦訳一七五ページ。『ドイツ・イデオロギー』における分業論に注目を払っている文献としては、それぞれ視角を異にしているが、①内田一男「生産関係範疇の形成」(1)~(II)、『山口経済学雑誌』第五巻第七~八号、同第九一~一〇号)、②宮本義男「資本論研究序説」(第一章第二節)、③遊部久蔵「疎外論の経済学的意義」などがある。

む す び

以上、われわれはまず第一節で、『ドイツ・イデオロギー』を経済学批判成立史の視角からとりあげるばあいに予

め解決されておくべき問題として、三つの問題を指摘した。本稿はこれらの問題の中から『ドイツ・イデオロギー』における疎外の理論の特質の問題(第二の問題)をとりだし、さらに考察の焦点を、この特質を規定するこの草稿における唯物史観成立の問題(第三の問題)にしぼった。まず第一・三節では、その端緒的形成がすでにパリ時代の分析の主軸をなした疎外の理論の展開とからみあい、かつそれに制約されつつおこなわれていたことを確認した。すすんで第四節では、『ドイツ・イデオロギー』での疎外の理論の唯物史観の体系への止揚を可能ならしめた基礎には、(イ)生産力の問題の反省とそれに対応する生産関係範疇の整備にもとづく生産様式の歴史的継起的展開の問題の一応の解決と、それに伴う唯物史観の理論的諸契機の体系化の可能性の獲得があり、またこの止揚は、直接には、(ロ)これまでほとんど未展開のままに放置されていた分業論の深化およびこの分業論を媒介環とする唯物史観の諸原理の展開とむすびついているように考えられる、ことなどを明らかにした。

かくて、いまや(ロ)の問題の本格的な展開にもとづき、『ドイツ・イデオロギー』におけるの疎外の理論の特質(第二の問題)をいまい少し具体的に究明しなければならないが、もはやそれは次稿での考察にゆだねるほかはない。しかもこの問題こそ、もともと本稿の主題であつたのだから、その意味では、本稿は問題の序論的考察の部分をおえたにすぎない。